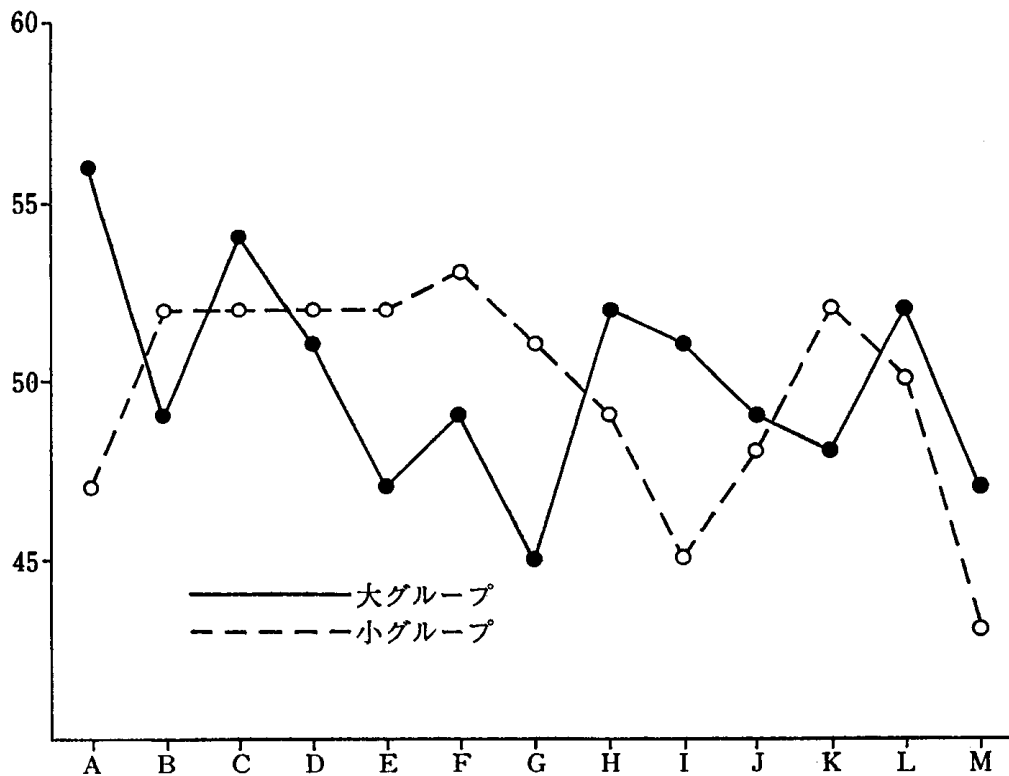


参 考 文 献

- 町田恭三 (1956): 身体の大きさと適応性, 教育と医学, IVの11, 57-62, 慶応通信.
- Jones, M. C., and Bayley, N. 1950 Physical maturing among boys as related to behavior. J. educ. Psychol., 41, No. 3, 129-148.
- Jones, M. C. 1957 The later careers of boys who were early-or late-maturing. Child Develop., 28, 113-128.



第10図 KBT行動評定検査結果 (女子) (身長に体重を加味した場合)

グループが身体大グループに対してまさっているようである。有意差検定の結果では「公正さ」、「指導性」、「同情心」に有意差を見つけることができる。

また女子においては第8図を見ればわかるとおり、身体大グループも身体小グループも長短相半ばしていて、いずれが特にまさっているとも、また劣っているともいい得ないようである。

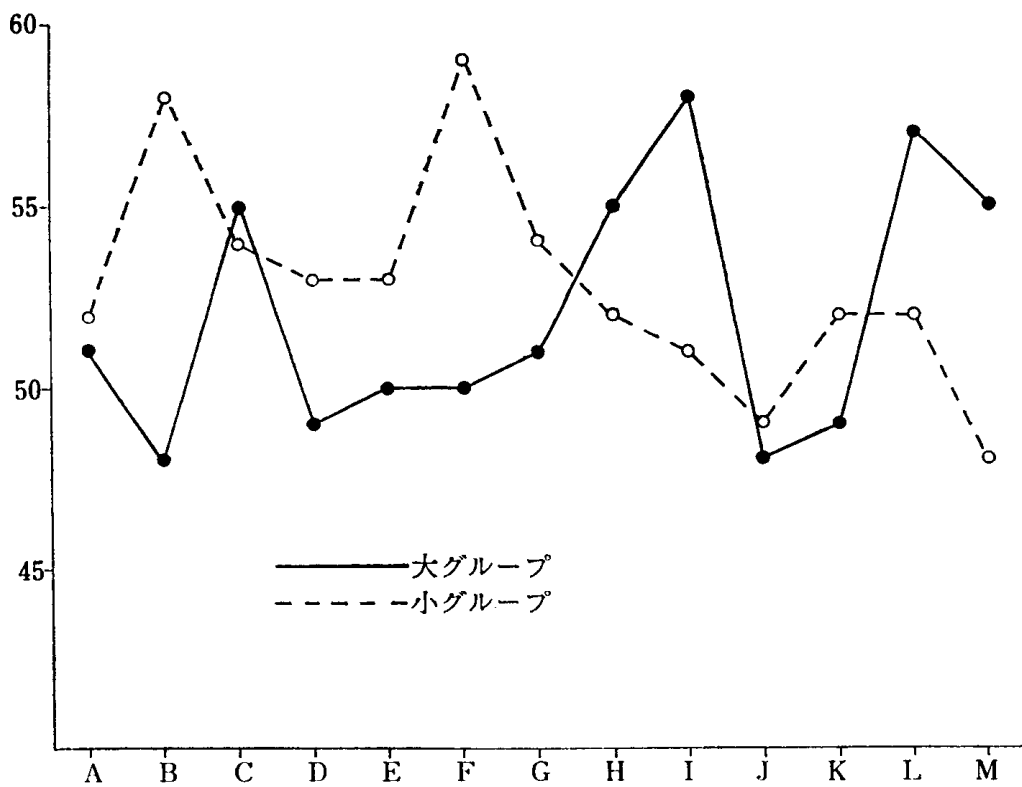
参考までに体重を加味した場合の両グループの状態は、第9図および第10図のようになる。

これも第7図、第8図とは余り違いがないようである。

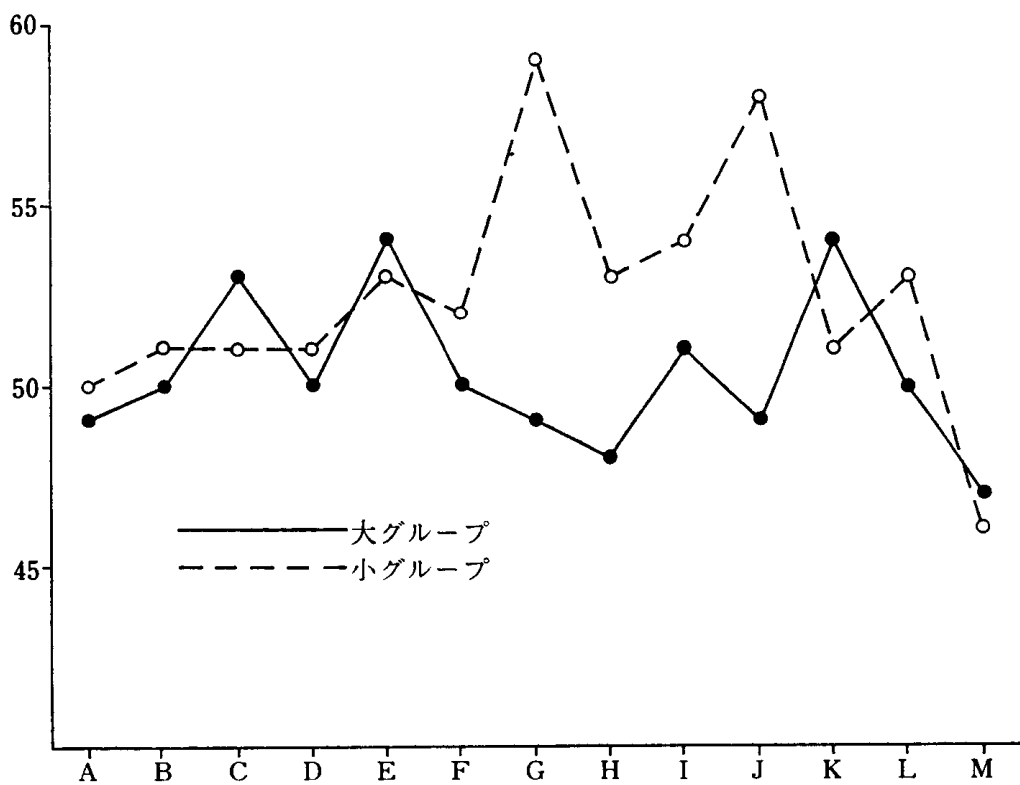
結 論

Jones, M. C. 等は身体成熟度は性格面や行動面とも関係を持つという。そして成熟度の進んでいるものは幾多の面で、男子の場合はすぐれているし、女子の場合は劣っているという。成熟度と身体の大小とは必ずしも一致するものではないが、今回の検査においては、調査対象、調査項目に多少違いがあるとはいえ、一概にはそのようなこともいえないのではないかということを見出した次第である。

しかしいずれがまさっているとか劣っているとかいうことを抜きにして、身体の大小は性格面、行動面とは無関係ではなく、相当な関係を持っているらしいことは図によって明らかである。この点については今後更に研究し、青年期の身体的なものと性格的なものとはどう影響しあっているか、確実な結果を出すように努力していきたいと思う。



第 8 図 KBT行動評定検査結果 (女子) (身長別のみの場合)

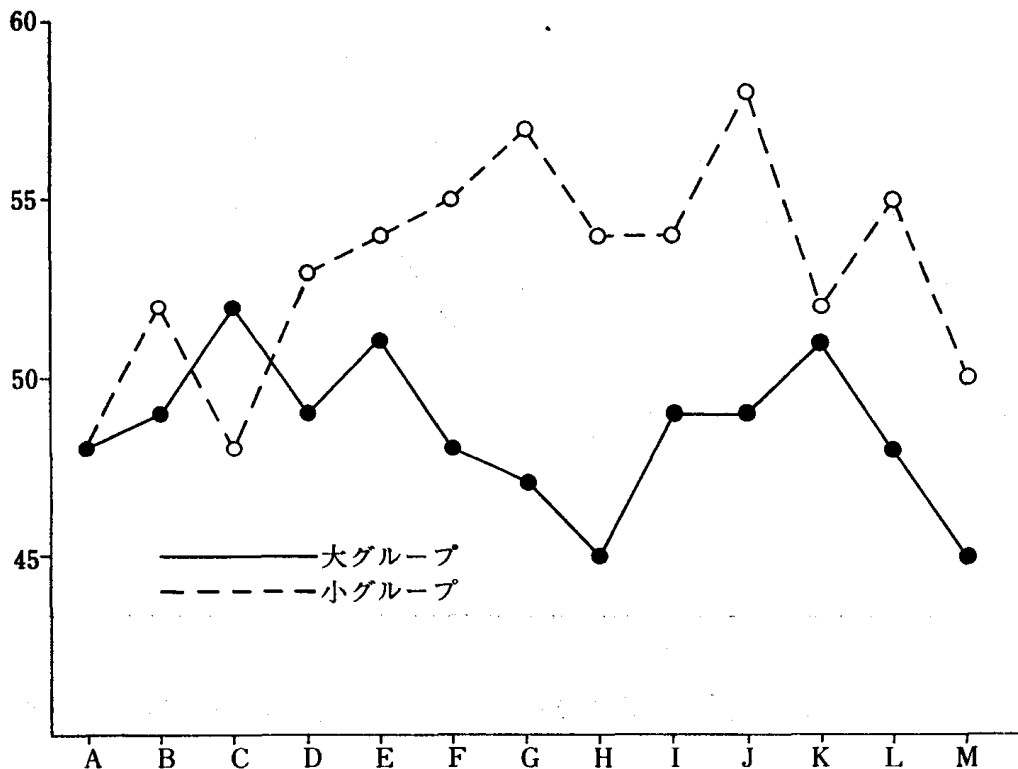


第 9 図 KBT行動評定検査結果 (男子) (身長に体重を加味した場合)

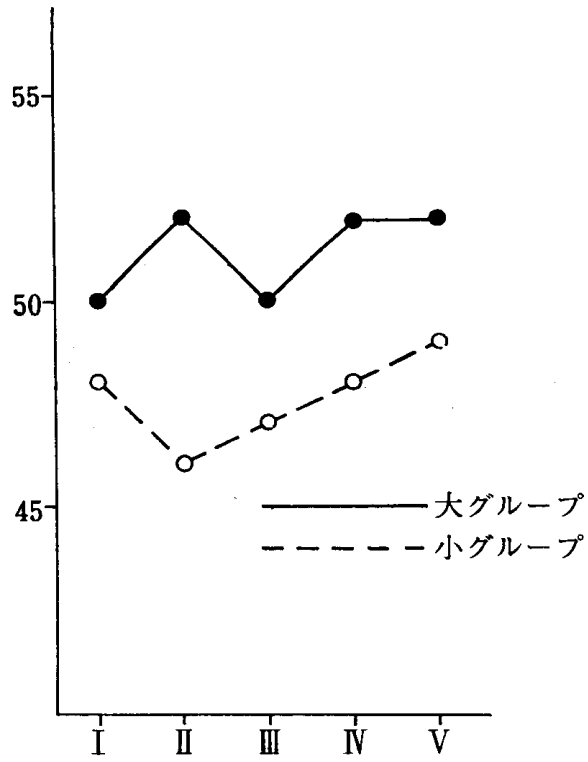
第3表 「KBT 行動評定検査」の結果

		男 子		女 子	
		身長大グループ (n=13)	身長小グループ (n=9)	身長大グループ (n=8)	身長小グループ (n=8)
A	基本的な生活習慣	47.61	48.33	51.12	52.62
B	自 主 性	48.53	52.11	47.50	57.75
C	責 任 感	51.61	47.88	55.00	53.87
D	根 気 強 さ	49.30	52.55	48.50	53.12
E	自 省 心	51.30	54.00	50.00	52.62
F	向 上 心	48.46	54.55	50.00	58.50
G	公 正 さ	47.38	56.66	51.12	54.12
H	指 導 性	45.15	54.33	54.87	52.25
I	協 調 性	49.38	48.22	58.00	54.25
J	同 情 心	49.38	57.55	47.75	48.75
K	公 共 心	50.53	51.55	49.00	52.00
L	積 極 性	47.53	54.66	56.62	52.12
M	情 緒 の 安 定	45.00	49.55	55.00	47.50

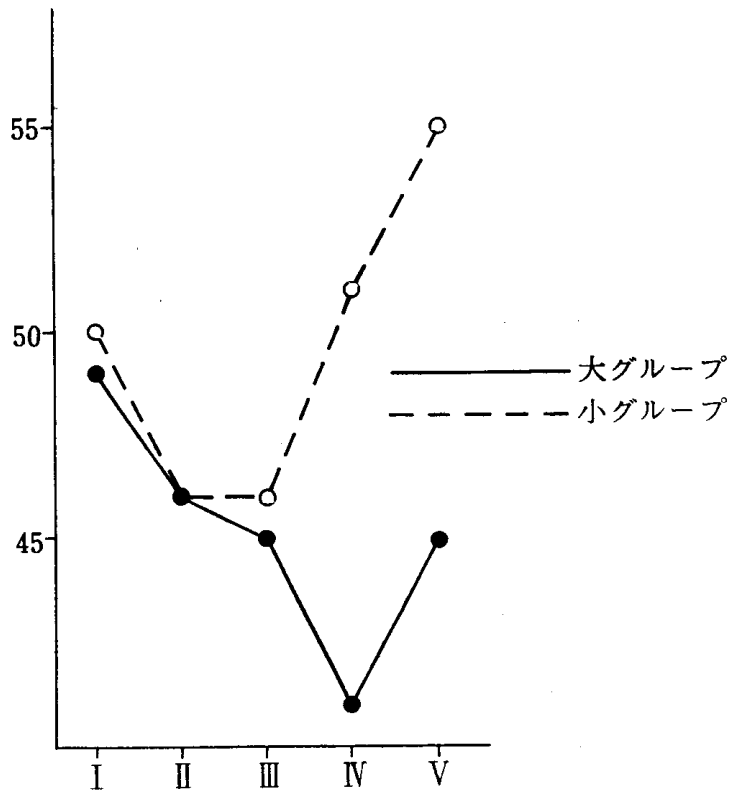
(註) *大小両グループの差, 5%以下で有意。



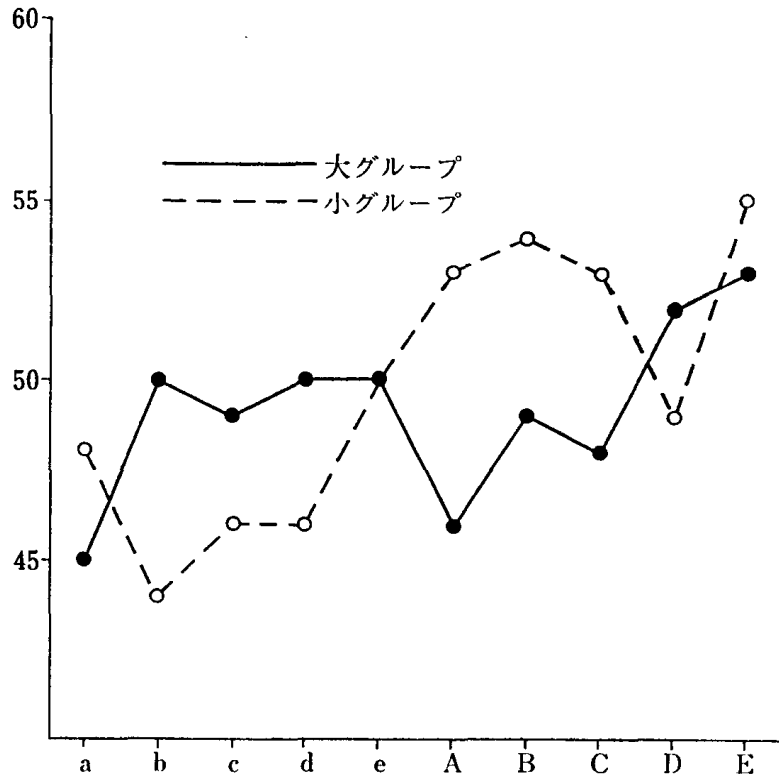
第7図 KBT行動評定検査結果(男子)(身長別のみの場合)



第 5 図 SMT学級適応診断検査結果 (男子)
(身長別のみの場合)



第 6 図 SMT学級適応診断検査結果 (女子)
(身長別のみの場合)



第4図 精神健康度診断検査結果 (女子)
(身長に体重を加味した場合)

第2表 「SMT 学級適応診断検査」の結果

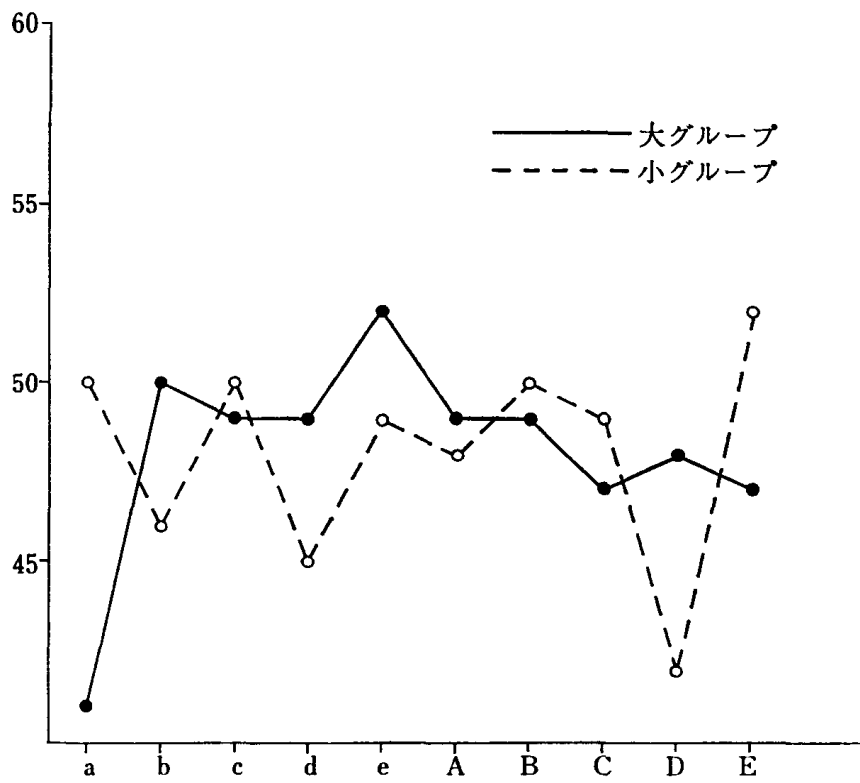
		男 子		女 子	
		身長大グループ (n=13)	身長小グループ (n=9)	身長大グループ (n=8)	身長小グループ (n=8)
I	学校への関心	49.84	48.44	48.75	49.50
II	級友との関係	52.30	46.44	45.50	46.37
III	学習への意欲	50.07	47.22	45.00	45.50
IV	教師への態度	51.92	47.77	*41.12	50.62
V	テストへの適応	52.46	49.22	*44.62	54.50

(註) *大小両グループの差, 5%以下で有意。

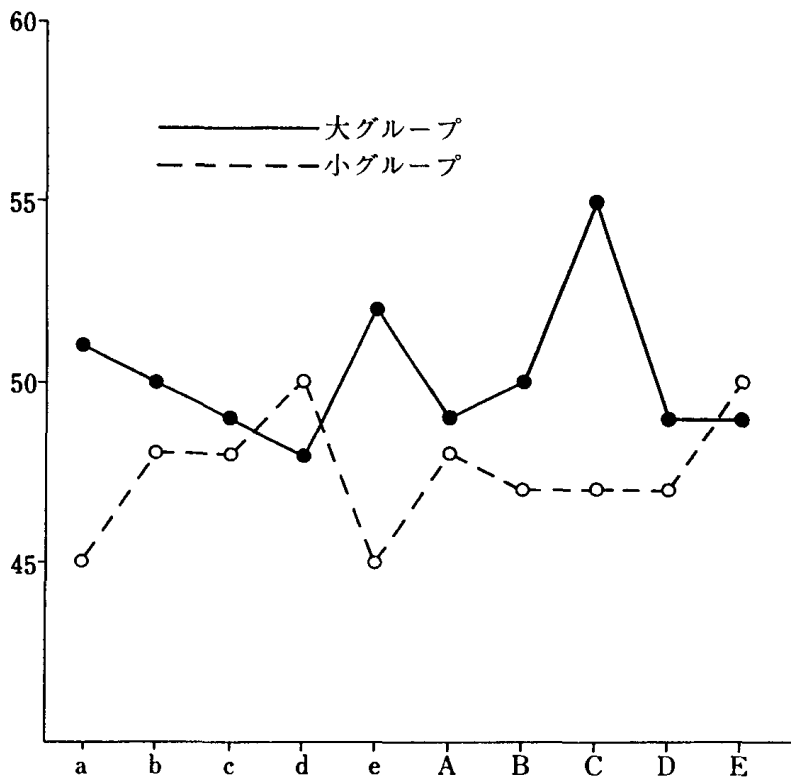
有意差検定の結果では, 女子における「教師への態度」, 「テストへの適応」にしか有意差を見つけることができなかった。しかし第2表および第5図, 第6図から見ると, いずれの項目についても男子においては身長の大グループがまさり, 女子においては身長の小グループが反対にまさっているように見える。

3. 「KBT 行動評定検査」を使って, 身長の大グループと小グループを比較検討してみた結果は, 第3表のとおりであり, これを図示すると第7図および第8図のようになる。

行動評定においては第7図を見ればわかるとおり, 男子においては一般的に, 身体小グ



第 2 図 精神健康度診断検査結果 (女子) (身長別のみの場合)

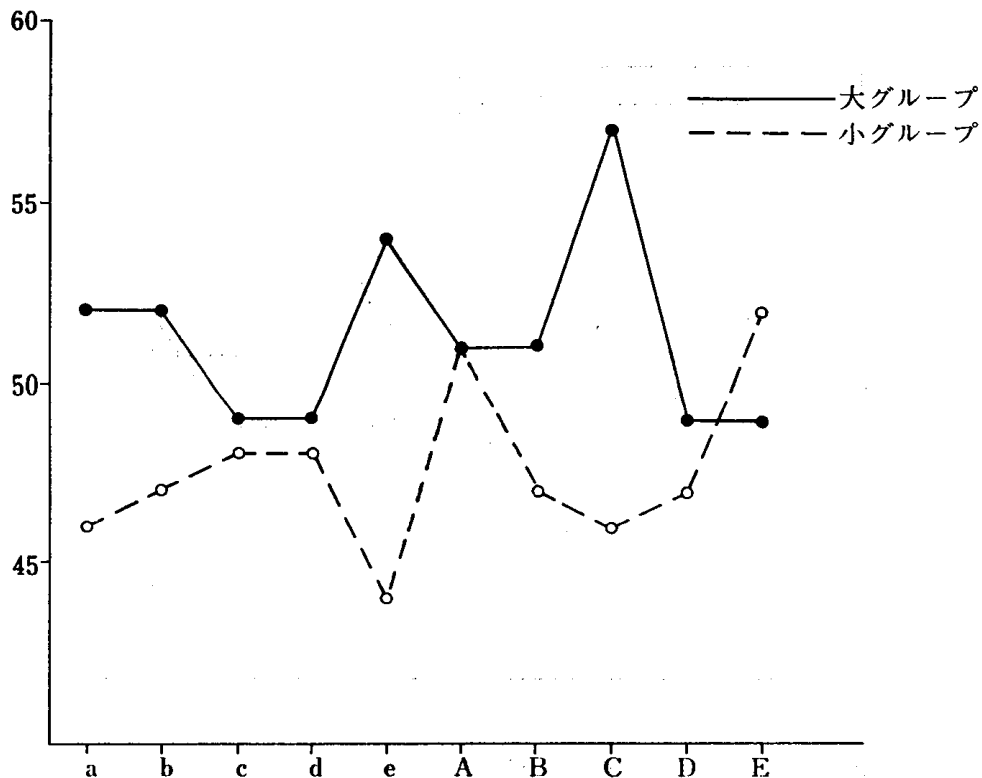


第 3 図 精神健康度診断検査結果 (男子)
(身長に体重を加味した場合)

第1表 「精神健康診断検査」の結果

		男 子		女 子	
		身長大グループ (n=15)	身長小グループ (n=9)	身長大グループ (n=5)	身長小グループ (n=8)
a	对人的親和度	51.73	46.00	41.20	49.87
b	对人的技能	52.33	46.66	50.00	45.87
c	集団参加度	49.06	48.32	49.40	50.00
d	勉強及び遊びの調和度	48.53	47.70	48.80	44.87
e	生活観	*53.66	43.77	51.80	49.37
A	行動の未成熟	50.93	51.00	49.40	47.75
B	情緒の不安定	51.13	47.11	48.80	49.75
C	不適応感	*56.50	46.00	46.60	48.87
D	器官劣等感	49.46	46.55	48.80	41.62
E	神経質の徴候	48.53	52.22	46.80	51.75

(註) *大小両グループの差，危険率5%以下で有意。また数値は大きいほど好ましい状態にあることを示す。



第1図 精神健康診断検査結果(男子)(身長別のみの場合)

2. 研究調査の時期

昭和46年6月から7月にかけてである。

3. 研究の方法

昭和46年4月実施の身体検査の結果から、 0.6σ を1段階として身長を男女別々に7段階に分け、5段階以上のものを身長の大グループ、3段階以下のものを小グループとして、両グループ間の性格面、行動面における差を比較検討してみることにした。

なお副次的に取り上げた身長と体重を合せ考えた場合も、同様な手続で身長体重ともに5段階以上を大グループ、3段階以下のものを小グループとして比較検討してみる。この場合の各グループの成員は、勿論身長のみ的大小によって作ったグループの成員とは多小異なってくる。

また男女ともに大グループおよび小グループの人数は、実施した下記検査ごとに多少の違いがある。これは各検査実施の時期に幾分かのずれがあるためである。

身長の大グループと小グループとの性格面、行動面における差は、下記の3検査を使用してとらえてみることにした。

○田中教育研究所 人格研究部著「精神健康度診断検査」日本文化科学社発行

○EIS 学校モラル研究会編「SMT 学級適応診断検査」日本文化科学社発行

○教育科学研究所編「KBT 行動評定検査」日本文化科学社発行

上記3検査の採点結果の表示法は、すべて各検査本来の表示法とは異なり、偏差値によって行なうことにした。

上記3検査を特に使用したのは、Jones等の取り上げている性格面、行動面の特性が標準化された客観テストとして、これらの検査の中に多く取り入れられているからである。

研究の結果

1. 「精神健康度診断検査」を使って、身長の大グループと小グループを比較検討してみた結果は第1表のとおりであり、これを図示すると第1図および第2図のようになる。

第1表の有意差検定の結果では、男子の「生活観」、「不適応感」においてのみしか有意差を見つけることができなかった。

しかし第1図を見れば明らかなおとおり、男子においては「精神健康度検査」の結果は、大体身長大グループの方が身長小グループに対して、好ましい状態にあるように見える。

また第2図によると女子においては、身長大グループと身長小グループは、甲乙つけ難い状態にあるように見える。

なお参考までに身長に体重を加味して作った場合の大グループと小グループとの状態を示すと第3図、第4図のようになる。第1図および第2図と余り違いはなさそうである。

2. 「SMT学級適応診断検査」を使って、身長の大グループと小グループを比較検討してみた結果は、第2表のとおりであり、これを図示すると第5図および第6図のようになる。

中学生における身体と性格

町 田 恭 三

序

Jones, M. C. 等の研究は、青年前期から青年中期にある生徒たちの身体面の発達の状態を調べてみ、その成熟度の進んでいるものと遅れているものを比較してみると、性格面でも行動面でも、幾多の違いのあることを示している。Jones 等によれば身体面の成熟度の進んでいるものは遅れているものに対して、その性格、更には行動面で、男子の場合は好ましい面を多々持っており、女子の場合は反対に好ましくない面を多々持っているという。青年期の身体面の成熟度と性格等の関係については、そのことを研究した論文はほとんど目につかないのであるが、果たして Jones 等のような事実があるのであろうか。町田は先に適応性のみを取り上げて青年期の身体成熟度とその適応性との関係を見、身長の大き過ぎるものも小さ過ぎるものも、ともにその適応性には幾つかの点で問題のあることを指摘したが、今回更に Jones 等とは幾分異なるが性格面、行動面の多くの特徴をとらえて、身体成熟度の遅速、それはただ身長的大小等からのみ見たものであるが、それと関係があるか否かを検討してみることにした。

なお身長的大小のみを取り上げて調べてみることにしたのは、身長と体重を合せて考慮した場合よりも、手軽にできるという実用的見地からと、青年前期の性格との関係においては余り体重は関係しないのではないかと予想したためである。

研究の目的

中学生の時期に身長的大小が性格的な面や行動的な面に、具体的にどのような影響を及ぼしているか、またそれが男女で差違があるものであるか否か、これらの点を検討してみようとするものである。

研究の対象と方法

1. 研究の対象

福岡市内K中学校2年生男子69名、女子57名である。K中学校2年生を選んだのは意図的なものではない。